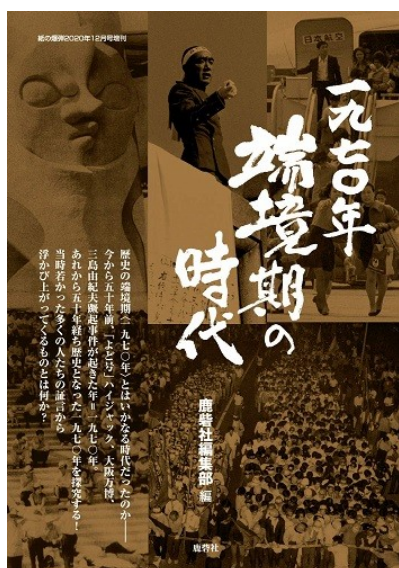


# 書評「一九七〇年端境期の時代」を読んで

2020年11月16日 重信房子



『一九七〇年端境期の時代』(鹿嶋社)を読んだところです。

私にとって1970年とは、ブント党内闘争の過ちの中から結成された、赤軍派の一員として69年の延長上に自分の力を尽くして活動していた時です。そしてこの年、1970年はハイジャック闘争やその後の未曾有の弾圧の中で、敗北を直視して行く年だったと捉えることが出来ます。この70年の活動の直視から私は、日本を出て、パレスチナー世界に闘いの場を求め、日本の革命を外から捉え直したいと思い、1971年元旦にその実行を決めました。そして、71年2月28日、日本を出発しました。

50年前の今頃は、勝ちたいのに闘えば闘う程敗北する、自分たちの過ちに気づき始めていました。それでも、やはり武装闘争に拘泥しながら新しい闘い方を模索していた頃です。今から思うと、

良く分からず、ただ一生懸命でした。



本書の中で、田原総一郎さんが言うように最もアナーキーで、それが魅力的でもあった時代です。ラディカルに闘う者を憧憬する雰囲気、全共闘運動や市民運動にもありました。同時にラディカルにエスカレートする闘いに「これで良いのか？」と悩みつつ考えた時代であったと思います。そして又、1970年は、長崎浩さんが言うように「岐れ道、それぞれ」であったと改めて思います。私の道とは反対に

誠実に水俣病闘争に向き合った人々の記録を矢作正さんの「一九七〇年当時の水俣病闘争」を読み、当時の自分の1970年を較べつつ捉えかえしてました。又高橋幸子さんの「駅前の家—私の一九七〇年」を読みつつ、活動の姿が活写されていて始めて幸子さんの来歴を知り、今の活動の繋がりを納得し、理解出来ると思いつつ読みました。まだこれから深くよみ続けたいと思っています。

でも、今回、この本を読んで是非記録して置きたいと思いたったのは、中島慎介さん執筆の「『7・6事件』に思うこと」という一文の為です。この中島さんの手記は、昨年私にも送って頂いて読みました。彼の真面目な記述に、昔の彼を重ねて特に後半の「7・6事件」への拘りと謝罪には好感をもって読みました。しかし私に関しては、全く身に覚えの無いことが記されていて、昨年も人違いでは？と伝えたのです。このままでは、彼の記録が「事実」として流布されるのは、本意ではないので、敢えて反論することにしました。今でも友人ではありますが、中島さんの記憶は大分怪しい。



かって私は、「さわさわ」(重信房子さんを支える会(関西)機関誌)に「私の京都・大阪物語」を連載しました。その中でも中島さんの記憶には驚かされました。それは「7・6事件」後、関西に赤軍派フラクションが退去した折りの話です。ある日同志社大学の神学部だったかはっきりしませんが、バリケード中の建物に同志社大学の友人たちと探検隊気分で入りました。その内に、住谷悦治学長室に入り、面白半分で「金目の物はないか？」などと冗談を言いながら物色していました。そこに全学闘の人たち(建物を管理している部隊)が突然現れて、「お前ら何をしているんだ！」と一喝されました。沈黙のあと、そのリーダーらしき人が「あっ、Sさんでしたか」と親しげに声を

上げると、学長の机の前に座っていたSさんは下を向いたまま「おう！」と応えるだけでした。「失礼しました」と彼らは立ち去りました。私は、どうなるのかとドギマギしたのに、Sさんは動じず凄いとすると、Sさんは「いや～恥ずかしくて顔が上げられなかっただけだ」と苦笑いして反省したエピソードの事です。



私のこの文章に、中島さんは「Sさんは自分のことだ」と言い、今回も240Pの「同志社探検隊」と記されているのは、この場面の事です。8月の事で遠山美枝子さん(明治大学・連合赤軍・72年死去)も一緒だったとあります。ところが、これは私が初めて関西に「7・6事件」後の7月に、皆についていった時の事です。塩見孝也さんらを中央大学から脱出させる計画の為に、東京に戻ったので7月の事です。それに、遠山さんは関西には来ていません。この私のエピソードの「Sさん」は、杉下雅一さんで同行者は、堂山道生(同志社大学)さんと神田敏一さんでした。中島さんの記憶の間違ひには、呆れました。どんな記憶をしているのか・・・と。でも、それは微笑ましい記憶間違ひで、まあいいか・・・と、そのままにして来ました。又、「一九六九年混沌と狂騒の時代」の164～167Pでも、「7・6事件」に関する中島さんのスピーチが紹介されていて、私に関する事実誤認は困ったものだと思っていました。でも、今回は公に「7・6事件」でいろいろ事実と違うことを、手記として記されており(「7・6事件」に思うこと)中島慎介)、少なくとも私に関するところは違う事を、指摘して置きたいと思いました。以下のような点です。

(1) 第一私は「7・6事件」前まで、中島さんと知り合いではありません。235Pに中島さん自身69年3月から7月まで、川崎地区反戦で活動していたと書いているし、当時の私には、神田・御茶ノ水界限以外の活動交流は無く、中島さんを知る条件もありません。221Pで、7月5日別室で待機して私と遠山さんとゆっくり会話したと記されていますが、それは「7・6事件」後の関東学院大学での事ではないでしょうか。だいたい、東京医科歯科大学515教室は、「別室」など無いガランとした教室です。私は、当時通常は明治大学学生会館を拠点にしている、6月下旬の全通労働者支援の総決起集会が明治大学記念館で開催され、この大会で初めてブント内の小競り合いがあったと言う話を、学生会館の現代思想研究会の部屋で聞きました。この前後から515教室に行き始めました。

私が赤軍派フラクションのリーダーかと思っていた佐野茂樹さんは居ず、塩見孝也さんがブント

のフラクションのリーダーらしいと理解しました。塩見さんとの出会いも、6月のフラクション会議の頃で、塩見さんから515教室で堂山さんを紹介され、フラクションの書記局を彼と藤本敏夫さんと3人でやってくれないかと言われました。それから、堂山さんを責任者として、何かを頼まれれば書記局の実務的なことをしていました。堂山さんとは、それが初対面でした。堂山さんは、神奈川で活動しているキャップで、彼を慕う何人かが関西から来て一緒に活動しているらしい事を、その頃知りました。一番初めに堂山グループで知ったのは、神田さんです。それも「7・6事件」後です。中島さんとは、「7・6事件」の後関東学院大学の頃から話始めました。車の運転が出来る人が限られていて、彼や大阪大学の岡さんなどで、レンタカーを調達したり、堂山さんや書記局の私も、お金のことや車の手配などを共同したりしました。「7・6事件」後の密度の濃いあの時間、色々な人たちと出会い親しく話すようになりました。

私と中島さんの交流は、この関東学院大学の頃の1週間か10日程の出会いのみです。その後、2000年に私が逮捕されてから、中島さんは何度か東京拘置所に面会に見えて話をしました。69年当時の中島さんは、いつも憂鬱そうと言うのが、私の印象でしたが、東京拘置所の面会の時は、逆に明るく若々しいのに驚かされました。

(2)「7・6事件」の日、中島さんによると、私が中島さんに薬を買って来てと、頼んだり、「機動隊が入ったので皆散り散りになって逃げた」「仏(さらぎ)徳二さん(ブント第7回大会議長・03年死去)が逮捕された!」「あいつらヒドイ! 仏さん用にタクシーを停めていたのに、目の前で彼を放り投げて、自分たちだけで逃げていった」と話した事になっています。(226P)当時、「7・6事件」以前には、高校生、「地区反戦」の人を含めて女性も多かったし、誰かの人違いではないでしょうか。まず第1に私は仏さんを殴打したり、仏さんが居る現場を見ていません。第2に中島さんに薬を買う様に頼んだことも無いし、第3に機動隊が既に入った事も知らないし、第4に仏さんを放り投げて逃げたのを見た事ありません。第5に仏さんが逮捕されたのは、私のみならず堂山さん、塩見さん始めその時は誰も知らないはずです。だって機動隊が入る前に皆退去したのですから。

私は「7・6事件」前の同日の朝、医科歯科大学515教室で、望月上史さん(同志社大学・69年死去)から東京駅に着いたという電話を受けました。堂山さんが望月さんと話した後に、私に「重信さんはここに残ってくれ、望月(モチ)が着いたら、彼を連れて明治大学和泉校舎の方に来てくれ」と言われ、皆が出発した後も望月さんを待ちましたが、一向に現れません。そのうち堂山さんから電話が入ったので「まだ望月さんが来ない。遅すぎる」と伝え、「それは良いから、直ぐに和泉校舎の方へ、有り金を持って来てくれ、大変なことになって、マルキ(機動隊の事)が入りそうだ。直ぐに金がいる」と言うのです。それで望月さんの到着待機を中断して、明治大学和泉校舎にタクシーで駆けつけました。

私が正門から入ると、堂山さんが待って居て駆けつけて来てお金を受け取り、その時、仏さんはずみで殴り、ひどい怪我を負わせてしまった事を話してくれました。その上、仏さんは逮捕状が出ているので、何とか無事に脱出させる為にお金が必要だと知りました。「何それ! そんなの革命じゃない! 」と驚き呆然としました。堂山さんは、「正門は危ないから裏門から直ぐ出た方がいい。515教室に戻ってモチに話してくれ」と言うので、私は裏



追想  
あらず  
1969年からの  
メッセージ  
三浦俊一

つなぐ  
意志を  
超えて  
時代を  
本世紀の「開戦の時代」、  
その前線にいた者たちが、  
未来へ向けて何を伝えたい  
か。其の記録。  
——前へ、前へ!

門から原っぱを通過して通りに出ました。——ここで仏さんグループの岩崎司郎さん(ブント蜂起派・13年死去)にばったり「こんなの革命じゃないよな」と言われた事は「追想にあらす」に記した通りです。——

明治大学和泉校舎に居たのは、ほんの1～2分の立ち話のみです。中島さんに東京大学へ向かえ(226P)などと指示する筈もありません。中島さんは、「一九七〇年端境期の時代」の中で、「仏さんが逮捕されたとの重信さんの話を聞き『あいつらヒドイ!』の言葉が、その後の小生の拘りになっていました」(230P)と記していて、私こそ啞然! 又、232Pに最後まで仏さんを守り続けた関西の友人たち——多分、堂山さんの指示で金銭も仏さんらに渡しつつ脱出を担当した人々。仏さんは、この人たちの逮捕を氣遣って、自分を置いて逃げろと強硬に主張したそうです。——が、中島さんに「しかしその辺りには、重信さんらしき人の姿はありませんでした。そこには、僕ら4人しか居ませんでしたよ」と語ったと記されています。その人の記憶も、私の主張を裏付けています。

中島さんは、誰かと間違えているか、妄想か? 「7・6事件」の後に、関東学院大学で皆で当時の事をワイワイ話していた事と、何か混同しているのか? まず、7月6日以前に私は、中島慎介という人を知らないのですから。

(3) 明治大学和泉校舎から医科歯科大学515教室に戻って。228P で中島さんは「望月さんと話をした」と主張しています。そして230P では、私が「日本赤軍私史」の中で後に分かったのだが、私が明治大学和泉校舎へ向かった後に、望月さんは医科歯科大学近くで拉致され、中央大学に連行されたと書いているが、自分は戻って望月さんと顔を合わせて話し、その4～5分後に襲撃された、と記しています。これも疑問です。私は、襲撃を受けた塩見さんらと一緒に消火器の噴射を浴びつつ応戦していました。この時に、望月さんが居た記憶はありません。居れば、堂山さんの意向を伝えようと医科歯科大学515教室に戻ったのに捜しても居ませんでした。それでおかしいな・・と他の人と話した記憶があります。望月さんは、この515教室に入る前にやられたのか、又は、私が堂山さんに呼ばれて和泉校舎へ出発した後に、515教室に着き誰も居ないところで拉致されたようです。少なくとも、私たちが襲撃され、塩見さんらを含めて拉致連行された時では無く、それ以前に中央大学に拉致監禁されて居たことは、明らかです。

つまり、中島慎介と望月上史が会うはずも会話をする事もあり得ません。それは、望月さんと行動を共にして上京し、望月さんと一緒に拉致監禁された物江克男さんの手記(「追想にあらす」)でも明らかです。物江さんは、塩見さんらが自分たちの後に、中央大学に拉致されて来たのに驚いているからです。「追想にあらす」(436～437P)に物江さんは以下の様に記しています。一九六九年七月六日東京医科歯科大から中央大学に拉致され、中大ブントから事情もわからずリンチを受け、塩見さんらが「さらぎ議長をリンチして殺しただろ! ?」と詰問され、棒で脛を殴られ失神しては水をかけられたと、述べています。そして、「共に拉致された望月上史さんは、右手が打撲であまり使え無くなっていた。僕より『リンチ』は厳しかったかもしれないが、彼はその内容を一切口ににできなかった。その後、驚いたことに塩見さん、花園さんが拉致されてきた。(中略)塩見さんから、さらぎ徳二さんを『リンチ』して結果として逮捕させてしまったことについて反省はほとんどなかった」と。それに515教室に中島さんが書いているようなシャッター(228P)はありません。普通

の教室のドアです。襲撃される4～5分前に塩見、田宮、花園さんは515教室に到着しました。でも仏さんの消息を気にしていました。仏さんの逮捕は、この時点で私たちは知りませんでした。

(4)「塩見さんの両手両足のツメが剥がされていました」(240P)の記述も疑問です。中央大学から塩見さんらの脱出後、箱根越えで関西へそのまま車を運転して移動したのは、明治大学現思研の仲間です。その後、東京に戻る塩見さんらの活動の場となったのは、私が7月に関西から戻って設営した一軒家です。京都から戻った塩見さんと同じ家に居ましたが、爪が剥がされた両手両足など記憶にありません。そんな話もなかったとは思っています。拉致された当初は、仏さんリンチ(物江さんが記しているように、中央大学グループ側が、仏さんが殺されたと思っていたかは不明)、逮捕の責任を問われ、かなり殴られたようです。でも花園さん(早稲田大学・東京社学同では、常に全力で突撃するので中央大学を含め人気があった)が盾になって、断固として塩見さんを守ったとの事。直ぐに三上治(中央大学・ブント叛旗派)さんが来て、暴力は止め、中央大学側の友人たちの側も「大飯食らい」の彼らを持って余し気味だったようです。

爪を剥がすような事をしたとは思えないのですが。——望月さんの、左腕では無く右腕骨折又はヒビが入ったのは事実と思う。——他にも、藤本敏夫さんから私が当日の事を聞いた話と中島さんの話の違いなど、私のこと以外でもまだ疑問が他にも多々あります。でも以上にします。



今から思えばですが、「7・6事件」は本当に闘いの希望の出発を台無しにしました。——佐藤秋雄さん(ブント蜂起派・20年死去)の本「ブント—その経験の一断面」で知ったのですが、塩見さんらのブント赤軍派フラクションを形成したリーダーたちは、それ以前にもブントのマルクス主義戦線派のリーダーを、反戦青年委員会の世話人会議中に暴力的に拉致したり、ブントに暴力を持ち込み、悪辣な独善を繰り返したと知りました。「7・6事件」が最初では無かったのです。そうであれば、結局「7・6事件」の様な事をどこかで起こしていたと言えらると思います。——

この「7・6事件」、ことに仏徳二議長を権力に逮捕させたこと、その結果自己批判しつつ「メンツ」としても、ブント赤軍派は成果ある闘いを焦ったと思います。準備不足の武装闘争へと、無理な「大阪戦争」「東京戦争」へと進む切っ掛けは、この「7・6事件」でした。「武装闘争」の大義で自己肯定したままの、この「7・6事件」の反省と教訓の不徹底が、森恒夫(ブント赤軍派・73年死去)指導部に継承され、唯軍主義の「連合赤軍」を生んだとも言えます。この不可能の壁の前でブント赤軍派同様、連合赤軍も自らを批判的に検証しきれず、観念の肥大化の中で無謀に壁に挑む事が隊内粛清事件へと転化していったと思います。

「7・6事件」の中島さんの文への事実関係の私の拘りは拘りとして、「7・6事件」を起こした当時のブント赤軍派フラクションからブント赤軍派に加わった一人として、改めて謝罪と反省を込めて、ここにその思いを記します。その意味で、中島さんの後半文章の謝罪の思いには、共感して読んだことを再び付け加えて置きます。

2020年11月16日(12月10日入力・12月17日校正)